新進路指導の潮流

そして生徒が変わる

福井県立武生高校

生徒自身に学習スタイルの改善のための目標を設定させる

高校3か年の指導の中でも、最近は高1、高2生を対象にした、いわゆる低学年指導の重要性が叫ばれ、多くの高校でさまざまな取り組みが始められている。福井県立武生高校の山口明彦先生は次のように語る。

「中でも、高1から高2へ進級する時期の指導は、橋渡し的な指導として特に重要だと思います。この時期は文理選択も終わり、目標に向かってがんばろうという気持ちを生徒に抱かせるのに適しています。高2になればより本格的な学部・学科研究、そして大学研究と忙しくなりますから、勉強に集中させ、学習スタイルを定着させるにはとてもよいタイミングなんですね」

しかし、3月から5月にかけては、年度末業務や新年度諸準備、さらに運動部の春の大会などで、きめ細かな指導を行うには教師はあまりにも忙しい時期だ。結果的に、新2年生を受け持つ担任が、クラスの生徒1人ひとりの習熟度や志向・適性を把握するのにもかなりの時間がかかってしまうだろう。

客観データで生徒を把握

2年生の理数科クラスを担任する盛高宏嗣先生も、従来の指導には改善すべき点があったと語る。

「確かにこれまでは、1年生の担任から新2年生の担任へは、生徒の模試の校内順位や偏差値くらいしか受け渡しができていないこともあったでしょう。そのため、その生徒がどの科目のどの分野が苦手で、また進級後、改めて把握していを持っているかは、進級後、改めて把握していくわけです。せっかく1年間かけて生徒のことを理解してきたのに、これではもったいないですよね」

武生高校の今年度の2年生は、1年生の1学期のときに高校生として望まれる学習スタイルの確立に、特に教師が留意した学年だという。その結果、家庭での学習習慣の定着にもかなりの手ごたえを教師は感じているという。そんなことからも、1年生から2年生への移行をいかにスムーズに進めるかが大きな課題となっていた。

「そこで1年生の3学期に、本校では初めて『スタディーサポート』を実施しました。個々の生徒の基礎学力、応用学力の到達度を、予習・復習など日々の学習状況とリンクさせて分析することがねらいです。もちろん、本校でも各学期ごとに生徒の状況を把握するための独自の調査を行っていますが、忙しい学期末の時期に、効率よくきめ細かな客観データが得られることを期待して導入したんです」（山口先生）

教師にとっては多忙な3学期も、生徒にとっては試験も終わって比較的ゆっくりできる時期。「普段の学習状況に一番近い時期に調査をした方が正確なデータが得られる」（盛高先生）というわけだ。

自分なりに目標を立てる

だが、新2年生の状況の把握は「スタディーサポート」だけで完結させられるというものではない。

「例えば、生徒の交友関係など、データだけではよくわからないこともありますよね。そこで学年全体の連絡会を開いて、クラスごとの生徒名簿を見ながら『この生徒は去年受け持ったんだけど、こんないいところを持っているので伸ばしてあげてください』といったように、教師間での情報交換を強化しているんです」（盛高先生）

また、武生高校の「スタディーサポート」の活用でユニークなのは、生徒個々の分析結果を生徒自身の自己理解と目標設定に活用しているという点だ。

「本校では、進路学習のための統一LHRを学年ごとに実施していますが、現2年生の第1回目では『スタディーサポート』の診断結果を利用した自己理解をテーマにしました。生徒に個人票を配付し、見方を説明した後、生徒各自が診断結果に対する感想を書くとともに、今後の学習スタイルの改善のための目標を設定しました。そして、そこで設定した目標がどれくらい達成できたか、1学期末のLHRで各自に検証させました」（山口先生）

「スタディーサポート」と模試の違いについて、生徒は事前に十分な説明を受ける。そのため、個人票の分析結果に一喜一憂するのではなく、2年生になってなにをどうがんばっていくかを考える材料として受けとめることができているという。

「個人票といっしょに配られる『スタディーナビゲーター』を見ながら、自分に足りない点、改善すべきところを把握し、2年生でがんばっていこうと生徒に伝えています。『スタディーナビゲーター』には国語、数学、英語の基本的な学習法が書かれていますが、これは担任も読んでいます。例えば、英語の辞書を引く際にどんなことに注意すればいいかなど、担任が教科を越えて日ごろから生徒を指導していきたいと思っています」（盛高先生）

自己変革の意識を求める

武生高校の「スタディーサポート」の活用の背景には、教師が生徒に指示を与えるだけの指導にとどまるのではなく、生徒自身に考えさせる指導をめざしていこうという思いがある。自分の進路を見据えたうえで、具体的に今、なにをどうすればいいか生徒に考えさせようとせず、ただ「○○しなさい」とだけ要求するのは古いスタイルの指導だと山口先生、盛高先生は考えている。

「今までは、先生のいうことを聞いてまじめにがんばる子が〝いい子〟とされてきましたよね。本校にもそんな〝いい子〟がたくさん集まってきています。例えば、各科目の先生に『数学を2時間勉強しなさい』『英語を2時間勉強しなさい』といわれたらフラフラになってでも全部やってくるような生徒もいます。でも、そんな生徒は先生が横で見ている間はだいじょうぶでも、先生の手から離れたらどうなるのでしょう?」（山口先生）

「スタディーサポート」の診断結果を自己分析するとき、生徒には「まじめにがんばる」だけでなく、「自己変革に積極的」であることが大切だと話すという。生徒の自己変革のためのしかけをいろいろと模索している武生高校において、「スタディーサポート」は学年移行期におけるしかけの一つに位置づけられているのだ。

山口 明彦
昭和35年福井県生まれ。地理担当。武生高校に赴任して、今年で7年目を迎える。進路指導部に所属。今年度は2年生の担任を務める。

盛高 宏嗣
昭和33年福井県生まれ。物理担当。理数科クラスの2年生を担任。学年の進路指導も担当する。武生高校に赴任して5年目になる。

福井県立武生高校